町村週報

（町村の購読料は会費の中に含まれております）

2731号

毎週月曜日発行

発行所　全国町村会　〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486　FAX03-3580-5955

発行人　山中昭栄：定価1部40円・年間1,500円（税、送料含む）　振替口座00110-8-47697　http://www.zck.or.jp

もくじ

活動　23年度概算要求で藤原会長が意見陳述＝民主党総務部門会議……（2）

視点　町長発止と語りき……東京大学名誉教授　西川　治……（3）

政策　住民基本台帳人口（2010年3月末現在）
町村部人口は15年連続で減少～全国人口1億2,705万7,860人～＝総務省……（6）

情報　里山からの便り②……NPO法人　INEOASA　皆田　潔……（9）

随想　「日本一のまちづくり」挑戦から実現へ！……山形県庄内町長　原田　眞樹……（12）

根子番楽（秋田県旧阿仁町）

閑話休題

根子・菜の花番楽まつり

法政大学教授　岡﨑（おかざき）　昌之（まさゆき）

初夏の暑さが身にしみ始めた6月の日曜日、秋田県旧阿仁町の根子集落で「第一回根子菜の花番楽まつり」が開催された。休耕田に植えられた菜の花を背景に、重要無形民俗文化財の根子番楽などを楽しんでもらおうという祭りだ。

その仕組みがすごぶる楽しい。盆地になった根子に入るには、たったひとつのトンネルしかない。そこを抜けた集落の入口に関所（受付）を設け、秋田杉で作った入村手形を2、000円で買ってもらう。昼食付はプラス千円。この入村手形を首からかけておけば、この一日、根子で催される祭りの行事に全て参加できる。

10時半の開会と同時に、参加者は集落をゆっくりと散策したり、マタギの守り神「山神社」に参ったり、地元産品を買ったりと、てんでに楽しんでいた。しばらくすると、交流施設「二又荘」で〝マタギとの語らい〟が始まったが、希望者が会場に入りきれないほどの人気。迫力のある本物のマタギの話や、子どもの頃、熊に襲われた経験を持つ元住民の体験談に参加者は魅了された。地元食材を使った昼食や冬の楽しみの寶引きも楽しんでいた。

何といっても圧巻は、廃校となった根子小学校の講堂で演じられた番楽であった。子ども達を中心に演じられる迫力溢れる演技に参加者は圧倒された。

戸数70戸、約170人の過疎化する集落が、この日は300人を超す人たちで賑わった。これまで集落内で若者や子どもの姿を見かけることは殆ど無かったが、この日ばかりは祭りを支える若者や走り回る子どもがまぶしいほどだった。当初は集落の人たちが県内に住む親戚に呼びかける程度で、と考えていたこの祭りだが、秋田根子の会の協力で、宮城県や関東からも多数が駆けつけた。

きっかけは3年前、まちづくり元気塾を契機に、住民が再度、集落を見直すことだった。自治会をはじめ根子番楽保存会、婦人会など、集落内の各住民グループが横断的に協力し合い、根子集落始まって以来の協働の祭りが開催できた。風の便りによると、この冬には楽しみを倍加した厳冬期ツアーも予定されているようだ。

◉写真募集◉

本誌表紙に掲載の写真を募集しています。
四季折々の風物や行事など適当な写真がありましたらご寄贈下さい。（写真には題名、町村名を付して下さい）
なお、採否は当方に一任願います。
送り先：全国町村会・広報部

民主党総務部門会議

23年度概算要求で藤原会長が意見陳述

▷意見を述べる藤原全国町村会長

民主党の総務部門会議（座長・福田昭夫衆議院議員）は8月23日、平成23年度概算要求について地方六団体等からヒアリングを行い、本会からは藤原忠彦（ふじはらただひこ）会長（長野県川上（かわかみ）村長）が出席した。藤原会長は町村の実情を踏まえ、地方交付税の所要額の確保やゴルフ場利用税の堅持、全国森林環境税の創設、後期高齢者医療制度の見直し、鳥獣被害対策等について意見陳述を行った。

藤原会長は、はじめに三位一体改革による地方交付税の大幅な削減等により地域が疲弊している中、地域のニーズに対応した行政サービスを提供していくためには「自主財源の増額」が不可欠であると強調。地方交付税について、先般決定された今年度の総額が1兆円増額されるとともに、段階補正の一部復元等の措置により殆どの町村で増額になったことに対し謝意を述べ、引き続き交付税の総額確保と今回3分の1の措置に止まった段階補正の全額復元を要望した。一方、一括交付金については地域主権戦略大綱で財政力の弱い団体に対する配慮が明確にされていないことを懸念、今後の制度設計に当たって町村の意見を十分反映するよう要望した。

次に、ゴルフ場利用税について、廃止を求める関係団体の動きがあると聞いているが、税収の7割が山村地域であるゴルフ場所在市町村に交付され、環境保全などの貴重な財源になっていることから、現行制度を堅持するよう求めた。加えて地球温暖化対策のための税について、今後本格化する議論にあたり、全国の多くの市町村や市町村議会が提唱している「全国森林環境税」の創設は、二酸化炭素の吸収源となる森林の整備・保全や森林・林業を支える山村の活性化を図るための確固たる税財源の制度化に向けた取り組みであるので、理解とその趣旨が最大限活かされるよう支援願いたいと述べた。

また、後期高齢者医療制度の見直しについては、新制度を創設する場合は、国民の幅広い理解と納得を得るためにも、地方の意見を充分に踏まえ、慎重に検討を進めることが重要であるとし、また、国保の安定運営を将来に亘って確保するため、個々の保険者の財政負担及び事務負担の増加を招かないようにするとともに、国・都道府県・市町村の役割分担が明確な制度とするよう要請した。

最後に、昨年実施された事業仕分けによって、鳥獣害対策予算が削減され、町村の実施計画が見直しを迫られていると説明。農水省所管の案件ではあるが、町村の農林業と住民生活を守るため、財源確保について支援願いたいと要請した。

視　点

町長発止と語りき

東京大学名誉教授　西川　治

豊かな巡り合いは人生の宝

全国町村会とのご縁は、今から二、三〇年前に遡ります。当時私は立正大学文学部に奉職中でしたが、昭和六三年の早春某日に自治省の木村仁さん（前参議院議員）からじきじき『町村週報』表紙欄の〝閑話休題〟に執筆するようにとの、お誘いを受けました。その第一回が「夢ごよみ」（一七九二号、一九八八・四・一一）で、最終回が「赤いランドセル」（二三九九号、二〇〇二・五・二七）、その間に全部で百一編に達しました。昨年末にはこれらを小冊子『還暦後の悦生集』（私家版）にまとめました。今年の半ばに満八五歳になりましたので、おかげでよい記念になりました。

私の関心領域は多岐にわたりますが、その一つ行政地理学の立場で脇役ながら、自治問題や地域振興などについても長年にわたり関与してきました。今から二五年以上も前になりますが、当時は三全総時代、民間の地域主義気運も広がり、ふるさと創生資金などに支えられて、市町村当局の創意工夫による公益施設づくりや町並み整備などが、競い合うように展開していました。そうしたなかでもユニークな事業の陣頭指揮にあたった首長さんたち、とりわけ町村長さんのお人柄や苦労話なども、地域研究者の立場で実地取材して学界・教育界のみならず、広く世間に紹介してみたい、と考えておりました。

一九八二年四月一日当時全国の市町村数は三二五五、そのうち町は一九九三、村は六一一、国土の半分以上が町域（町村面積は七割）であり、国民の五人に一人は町村の住民。歴史的情緒を保つ小都市を核とする町も多かった。それらを地方の時代にもっとクローズアップしてみたいと願っていたからです。

折りしも、平凡社のある刊行記念祝賀会で、たまたま隣合わせに同席された雑誌『太陽』の編集長鷲巣力さんに持論の企画を持ちかけてみました。すなわち、全国八地方から各お一人、町起こしで奮闘している著名な町長八氏を選んで、〝打打発止〟とやり合ってみたいが、どうでしょうか、と。

まさに打てば響くような応答。ただし、連載は半年か一年との決まり。なれば一二名お願いすることにして〝バッシ〟の語呂合わせは消滅。毎回一泊二日が標準、出版社からはカメラマンが同行、町長の尊顔写真を大きく、町域の特徴的な風景や郷土料理なども載せるといった格別の配慮に感謝感激。

だが、私は約二年後に東京大学の定年退職を控えて超多忙なので、毎月一回はとても無理。そこで畏友の服部銈二郎（立正大学教授）と市川健夫（東京学芸大学教授）の二方（人文地理学者）に協力を仰ぎ、各人が選んだ四町長に面接することになった。デラックスな大判雑誌に五ページ

視　点

ジの連載、その大きな見出しは「名物町長発止と語る」、私たちの実名は伏せて、小生の発案で共通のペンネームは〝フードロジスト〟（風土人の造語）として、そのAは服部、Bが西川、Cは市川と最終回で明かした次第。快く応対して下さった町長の尊名と掲載誌の年次と通算番号は次の通り。平成の大合併で当時の町名は残念ながら歴史的地名になった所もあります。名物町長発止と語る…月刊誌『太陽』平凡社、NO.265（1984.6）～NO.278（1985.6）は以下の通り…

1.インタビュアーH＝服部銈二郎
NO.265　愛媛県内子町長・河内紘一

2.インタビュアーN＝西川　治
NO.266　東京都八丈町長・奥山日出男

3.インタビュアーI＝市川健夫
NO.267　長野県信濃町長・小林一雄

4.H:NO.268　佐賀県有田町長・青木類次

5.N:NO.269　宮城県中新田町長・本間俊太郎

6.I:NO.270　岐阜県穂積町長・松野　友

7.H:NO.273　山形県山辺町長・稲村久伝

8.N:NO.274　兵庫県社町長・石古　勲

9.I:NO.275　沖縄県与那国町長・入仲誠三

10.H:NO.276　岡山県牛窓町長・新地　勇

11.I:NO.277　北海道斜里町長・船津英雄

12.N:NO.278　茨城県玉造町長・坂本常蔵

もしも総理大臣になったら

最初のインタビューは服部教授が担当、応対下さったのは愛媛県内子町長河内紘一氏。掲載紙面の見開き右ページには町の俯瞰写真と観光マップ、簡潔な内子町の紹介。左ページ上段には三八歳の誕生日に町長に当選した河内氏の笑顔。本文は風土人Aの問い掛けで始まる。「お国自慢のない町は殺風景でつまらないものですが、内子町のお国自慢は何でしょうか」と。町長「内子では町並み保存運動に力を入れています。八日市に続く白壁の町並みは内子の顔、町のアイデンティティそのものだと思います。今の町並みは、内子の木蝋生産、これは宝暦四（一七五四）年に始まりましたが、その生産がのびて、海外に輸出されるようになり、経済力が貯えられた明治の中ごろに建てられたものでしょう。それに遍路道や金比羅参道の宿場町として、また名刹高昌寺の門前町としても早くから開かれていましたから、そういう要素が集成されたものとみています」と。これを皮切りに、〝御先祖様は楠木正成、滅私奉公の血が流れる〟（最初のゴチ見出し）町長との家庭生活もはさんでの、楽しい会話が弾む。続く三つの見出しは、〝町長なんかやめろと口を揃える子どもたち〟に〝高次元農業の振興と内子文化の創造〟、結びは〝もしも総理大臣になったら八割自治行政を推進する〟との意気に感じて、風土人Aは名文で締め括る。「語尾がやや尻上がりするような方言交じりの話し方、町長の笑い声は、黒光りする頑丈な大黒柱に反響し、高い天井に吸い込まれる。郷土の政治家の大先輩、大平さんを彷彿させる風貌、親しみのもてる童顔、話しについ引き込まれて行く」と。全文を転載できないのは残念至極。

いきなり〝名物〟非難

風土人Bは、この連載の第八回目に兵庫県社町（現在は加東市内）を選んだ。この町は、明石市を通る日

西川　治（にしかわ　おさむ）

東京大学名誉教授、（財）日本地図センター研究顧問、（財）地図情報センター顧問、福武学術文化振興財団理事、富士学会名誉会長

1925年東京生まれ、東京帝国大学理学部地理学科卒業、理学博士、1971年東京大学教授、1984年放送大学客員教授、1987年立正大学教授。

第一三期日本学術会議会員、東北開発審議会専門委員、文部省大学設置審議会専門委員、全国町村会町村自治研究会委員、全国知事会自治制度研究会委員、多摩市総合計画審議会会長、日本地理学会会長などを歴任。

主な著書に「人文地理学入門」（東京大学出版会）、「地球時代の地理思想」（古今書院）、「農村のヒューマンエコロジー」（古今書院）、「日本観と自然環境」（暁印書館）、地球人の地図思考」（暁印書館）、「日本水土考の余滴」（デマンド）など

視　点

本標準時子午線と中国自動車道が交わる付近にある。古くは佐保社と呼ばれ、その名は佐保神社に由来。国宝の朝光寺、重文指定の上鴨川住吉神社の神事舞、西国二五番札所の清水寺などで有名。当時は田と草と山の町に国立の兵庫教育大学が設置された。塀のない学園には桜・木蓮・花水木が次々に咲き競う。国際的視野に立って産学住一体の町づくりに励む石古町長（五三歳）を訪ねた。Bより六歳若いがなかなかの貫禄。（以下、掲載誌からの引用は適宜簡略化）。インタビューの趣旨を述べるやいなや、「私は名物町長でもないし、大した者じゃない。『太陽』のこういう言葉は気にいらない。真剣そのものでやっているんだから」とのご挨拶。B「これは面白い。では名物批判から始めましょうか。」町長「行政というものは、町長とか市長などが一人でやるんじゃないんです。住民がやるんです」。B「それが本来のコミュニティですよね」。町長「住民からすれば、町長が〝名物〟ならば、われわれのほうも名物じゃないかと、おちょくられたら、怒りますがな。だから私は〝しまった〟とおもった、お断りしておけばよかった。雑誌を見る前にOKしてしまったもんだから」。B「後の祭りですね。兵庫教育大学の某先生に伺いましたが、石古町長は〝名物〟というとご機嫌が悪いそうですね」。町長「わしは全国の町長に代わって、一ぺん文句を言っておかなきゃ、と思った」。

さすが大名物の器量

次に、なぜこの町に国立大学の誘致に成功したのか、お尋ねした。町長「当時、大学局長に厳然と意見を申し上げた。日本は国が狭いから、せっかちな国民性になるのかしらないけれど、大らかな人間生活をする国民性をつくらなきゃいけない。一つくらい、素朴な田舎で日本人をつくる教育こそ大事なんじゃないかと」。B「全く同感です」。町長「それでな、私は申し上げた。社町に都市機能はないけれども、桜の木を五〇〇本、住民の力で植えましょう。木蓮も三〇〇本大学にもっていきましょうと」。その何ヵ月後に局長に出会ったら、ハナミズキという木をご存じか、ときかれて、その時は知らなかったが、花水木も三〇〇本植えましょう、と約束。後で一本一万円もすると知って、えらいことになった、三〇〇万円を予算化せにゃならん。困った挙げ句、（財）日本さくらの会事務局長に頼んでこれも実現。植樹や管理は住民の「花と緑の協会」員の奉仕。風土人B「昨日、大学を訪問したんですが、谷口学長が玄関まで見送って下さって、町長のおかげでこんなに植樹ができたと、感慨深げに申されましたよ」。町長「これが日本の教育に対する社町住民の心からの奉仕です」。花も実もある名調子の語りに聞き惚れて、なかなか口をはさめない。

大物社長を口説くのも石古町長の芸のうち。工業団地には、リコー・松下電器・富士通の工場誘致にも成功、これも異例。しかし、最初に手をつけていた富士通がなかなかきてくれなかった。社長は年に三、四回しか大阪支店にやってこない。友人のつてで再度の面会。町長「挨拶の後、わしは例の国立大学の一件を話しました。それでな〝小林さん、富士通は日本一のコンピューター会社だが、いつまで外国が日本のコンピューターを買ってくれると思ってるんですか〟と言ったら、〝えらいことを言う、そんなの判らん〟というわけですがな。それでは、企業秘密なんて言ってないで、小学生や中学生に富士通の工場の生産状況を見せてやれ。ロボットがどんなにして働いているかを。日本のレベルをもっとあげなきゃいけない。それらの知識を子供に与えてやらなきゃいかん。社町にも中小企業があるから、技術指導をしてやってくれ、あんたの工場の中に実習所か教室みたいなものを一つか二つ作って欲しい、と注文をつけましたのや」。B「その場を借りて稼ぐばかりじゃなくて、その地域の教育なり文化なりに寄与するのも企業の社会的責任ですよね」。町長「そしたら社長が、〝お前は勉強した男やな〟と言ってくれたりして、一時間も話をしたんです。桜の話までしましたがな（笑い）」。

まだまだ再録したい業績は多々あれど、やむなく割愛。おみやげに頂戴した色紙には「耕不盡」、町長がお好きな禅語の一つ、書は中学時代から励み、号は「秀草」。町長宅の二階は六畳一間、奥方も立ち入り禁止の天守閣。独り書をかき、丹波焼きを鑑賞したり、静かに心を養う。名物を超越した花の町長はまだ五三歳、なおいっそうのご活躍を期待、地方の時代を確認できた体験談を、一先ずこれにておさめることに致します。

住民基本台帳人口（2010年3月末現在）　総務省

町村部人口は15年連続で減少

～全国人口１億2,705万7,860人～

全国人口は3年ぶりに減少

総務省はこのほど、住民基本台帳に基づく人口、人口動態、世帯数（2010年3月31日現在）を公表した。それによると、全国人口は1億2705万7860人で、前年より1万8323人減少し、3年ぶりに減少に転じた。全国人口は調査開始以来、06年に初めて減少（3505人減）し、07年も減少（1554人減）。08年、09年と増加していたが、再び減少となった。なお、全国人口の男女別内訳をみると、男性は6208万435人で構成比は48・86％、女性は6497万7425人で構成比は51・14％となっている。

都道府県別の人口が多い上位5団体は、東京（1260万人）、神奈川（888万人）、大阪（868万人）、愛知（723万人）、埼玉（712万人）の順。一方、人口が少ないのは鳥取（59万人）、島根（72万人）、高知（77万人）、徳島（79万人）、福井（80万人）の順。なお、人口が多い上位9団体で、全国人口の半分以上（52・60％）を占めている。

都道府県別に人口増減の状況をみると、9団体（前年10団体）で人口が増加し、前年に比べ1団体減っている（兵庫が減少に転じた）。対前年の人口増加数が最も多いのは、東京で、神奈川、埼玉の順。一方、対前年の人口増加数が最も少ないのは北海道で、福島、青森が続いている。

人口増加率が最も高いのは沖縄（0・60％）で、次いで東京（0・49％）、神奈川（0・42％）の順。人口増加率が最も低いのは秋田（△0・94％）、次いで青森（△0・83％）、岩手（△0・75％）の順で続いている。

町村部人口が86万人減少

全国の人口を市部と町村部に分けてみると、市部人口は毎年増加し、2010年は1億1495万4512人（90・5％）で、前年に比べ85万1073人（0・75％）増加。一方、町村部人口は96年以降毎年減少し、2010年は1210万3348人（9・5％）で、86万9396人（△6・70％）の減少となった。なお、09年度における市制施行及び合併により、町村部から市部へ移動した人口は79万7728人だった。

市の中で最も人口が多いのは横浜市（362万人）で、次いで大阪市（253万人）、名古屋市（217万人）の順。2万人未満の市は13市で、少ない方から歌志内市（4589人）、三笠市（1万673人）、夕張市（1万1213人）の順で続く。5万人超の町村は4町村で岩手県滝沢村（5万3481人）、広島県府中町（5万781人）、千葉県大網白里町（5万720人）、埼玉県白岡町（5万144人）。500人未満の町村は7村で、少ない方から東京都青ヶ島村（165人）、東京都利島村（297人）、東京都御蔵島村（303人）の順で続いている。

三大都市圏の人口は6417万1324人で、全国人口の50・51％（前年50・37％）となり、4年連続して50％を超えた。一方、地方圏の人口は6288万6536人で、全国人口の49・49％（前年49・63％）となっている。また、全国の世帯数は5336万2801世帯で、前年に比べ48万4999世帯、0・92％の増加。1世帯平均構成人員は2・38人で、住民基本台帳制度の発足以来、毎年減少している。1世帯の平均構成人員を都道府県別にみると、最も多いのは福井で、山形、富山の順。逆に最も少ないのは東京で、北海道、鹿児島が続く。

政　策

自然増加数は3年連続でマイナス

人口動態をみると、自然増加数（出生者数－死亡者数）は、△7万3024人。人口動態の調査開始以来、05年度に初めてマイナスとなり、06年度は一たんプラスに回復したものの、07年度から09年度まで3年連続してマイナスとなった。全国の出生者数は05年度に過去最低を記録し、06年度、07年度とやや増加傾向にあったが、08年度は再び減少し、09年度（107万3081人）も引き続き減少した。一方、死亡者数は調査開始以来増加傾向にあり、09年度は過去最高の114万6105人となっている。

人口が自然増加となっている都道府県は前年から1団体減って9団体（石川県が減少に転じた）。自然増加数が最も多いのは愛知（1万4445人）で、神奈川（1万3842人）、東京（8392人）が続く。自然増加率では、沖縄（0・50％）が人口動態の調査を始めた昭和54年度以降31年連続してトップで、次いで愛知（0・20％）、滋賀（0・16％）の順。また、自然増加数が最も少ないのは北海道（△1万3330人）で、次いで新潟（△7607人）、秋田（△6880人）が続く。自然増加率が最も低いのは秋田（△0・61％）で、高知（△0・52％）、島根（△0・43％）の順。

人口が社会増加となっているのは12団体（前年9団体）で、前年から3団体増えた。社会増加数（転入者等数－転出者等数）が最も多いのは、東京（5万3262人）で、次いで神奈川（2万3287人）、千葉（2万1676人）の順。社会増加率が最も高いのは東京（0・42％）で、次いで千葉（0・35％）、埼玉（0・27％）が続く。一方、社会増加数が最も少ないのは北海道（△9332人）で、福島（△6611人）、青森（△5749人）の順。社会増加率が最も低いのは青森（△0・41％）で、次いで岩手（△0・34％）、秋田（△0・32％）の順となっている。

▼市部及び町村部の人口動態

区分		市部	町村部
平成21年3月31日現在人口	(A)	114,103,439 人	12,972,744 人
平成21年度に市制施行及び編入合併により町村部から市部へ移動した人口	(B)	797,728 人	△ 797,728 人
平成21年度	自然増加数（C）	△ 29,200 人	△ 43,824 人
	自然増加率（C）／｛(A)＋(B)｝	△ 0.03 %	△ 0.36 %
	社会増加数（D）	82,545 人	△ 27,844 人
	社会増加率（D）／｛(A)＋(B)｝	0.07 %	△ 0.23 %
	増加人口（B）＋（C）＋（D）＝（F）	851,073 人	△ 869,396 人
	［(C)＋(D)＝(E)］	［ 53,345 ］	［△ 71,668 ］
	増加率（F）／（A）	0.75 %	△ 6.70 %
	［(E)／｛(A)＋(B)｝］	［ 0.05 ］	［△ 0.59 ］
平成22年3月31日現在人口（A）＋（F）		114,954,512 人	12,103,348 人

▼人口の多い町村

順位	町村名		人口（人）
1	滝沢村	（岩手県）	53,481
2	府中町	（広島県）	50,781
3	大網白里町	（千葉県）	50,720
4	白岡町	（埼玉県）	50,144
5	那珂川町	（福岡県）	49,591
6	東浦町	（愛知県）	48,648
7	長久手町	（愛知県）	48,069
8	寒川町	（神奈川県）	47,581
9	杉戸町	（埼玉県）	47,270
10	富谷町	（宮城県）	47,211
11	阿見町	（茨城県）	46,762
12	野々市町	（石川県）	46,293
13	音更町	（北海道）	45,395
14	熊取町	（大阪府）	44,566
15	志免町	（福岡県）	43,013
16	長与町	（長崎県）	42,656
17	粕屋町	（福岡県）	42,267
18	伊奈町	（埼玉県）	42,107
19	武豊町	（愛知県）	41,713
20	愛川町	（神奈川県）	40,780

▼人口の少ない町村

順位	町村名		人口（人）
1	青ヶ島村	（東京都）	165
2	利島村	（東京都）	297
3	御蔵島村	（東京都）	303
4	粟島浦村	（新潟県）	345
5	三島村	（鹿児島県）	351
6	渡名喜村	（沖縄県）	419
7	大川村	（高知県）	469
8	北山村	（和歌山県）	504
9	北大東村	（沖縄県）	514
10	平谷村	（長野県）	517
11	野迫川村	（奈良県）	556
12	十島村	（鹿児島県）	579
13	檜枝岐村	（福島県）	617
14	売木村	（長野県）	619
15	知夫村	（島根県）	640
16	渡嘉敷村	（沖縄県）	678
17	上北山村	（奈良県）	697
18	丹波山村	（山梨県）	708
19	粟国村	（沖縄県）	837
20	小菅村	（山梨県）	842

▼住民基本台帳に基づく都道府県別の人口及び世帯数

都道府県名	人口					世帯		
	平成22年３月31日 人口数 A 人	平成21年３月31日 人口数 B 人	増加数 A－B 人	増加率 A－B / B %	前年増加率 %	平成22年３月31日 世帯数 C 世帯	１世帯平均構成人員 A／C 人	前年１世帯平均構成人員 人
北海道	5,520,894	5,543,556	△ 22,662	△ 0.41	△ 0.51	2,654,310	2.08	2.10
青森	1,405,535	1,417,278	△ 11,743	△ 0.83	△ 0.93	571,091	2.46	2.50
岩手	1,345,007	1,355,205	△ 10,198	△ 0.75	△ 0.84	503,139	2.67	2.71
宮城	2,329,344	2,330,898	△ 1,554	△ 0.07	△ 0.17	906,925	2.57	2.59
秋田	1,108,237	1,118,735	△ 10,498	△ 0.94	△ 1.07	419,270	2.64	2.68
山形	1,176,759	1,185,100	△ 8,341	△ 0.70	△ 0.75	397,683	2.96	2.99
福島	2,051,626	2,063,769	△ 12,143	△ 0.59	△ 0.57	749,760	2.74	2.77
茨城	2,979,139	2,979,639	△ 500	△ 0.02	△ 0.08	1,121,039	2.66	2.69
栃木	2,000,774	2,003,954	△ 3,180	△ 0.16	△ 0.14	753,859	2.65	2.68
群馬	2,004,786	2,008,842	△ 4,056	△ 0.20	△ 0.16	766,784	2.61	2.64
埼玉	7,123,084	7,096,269	26,815	0.38	0.41	2,910,960	2.45	2.47
千葉	6,149,799	6,124,453	25,346	0.41	0.55	2,573,718	2.39	2.41
東京	12,609,912	12,548,258	61,654	0.49	0.69	6,296,239	2.00	2.01
神奈川	8,885,458	8,848,329	37,129	0.42	0.57	3,928,288	2.26	2.28
新潟	2,391,091	2,401,803	△ 10,712	△ 0.45	△ 0.47	849,247	2.82	2.85
富山	1,097,736	1,101,637	△ 3,901	△ 0.35	△ 0.43	388,425	2.83	2.86
石川	1,162,950	1,165,013	△ 2,063	△ 0.18	△ 0.18	444,565	2.62	2.65
福井	809,465	812,444	△ 2,979	△ 0.37	△ 0.36	272,292	2.97	3.00
山梨	864,210	867,122	△ 2,912	△ 0.34	△ 0.50	335,689	2.57	2.60
長野	2,161,572	2,168,926	△ 7,354	△ 0.34	△ 0.36	814,404	2.65	2.68
岐阜	2,083,118	2,089,413	△ 6,295	△ 0.30	△ 0.29	745,569	2.79	2.83
静岡	3,769,685	3,773,694	△ 4,009	△ 0.11	△ 0.05	1,440,680	2.62	2.64
愛知	7,237,612	7,218,350	19,262	0.27	0.45	2,891,553	2.50	2.52
三重	1,849,703	1,854,050	△ 4,347	△ 0.23	△ 0.12	724,893	2.55	2.58
滋賀	1,386,570	1,382,321	4,249	0.31	0.32	510,070	2.72	2.75
京都	2,551,706	2,555,650	△ 3,944	△ 0.15	△ 0.11	1,116,543	2.29	2.31
大阪	8,683,035	8,676,622	6,413	0.07	0.07	3,901,462	2.23	2.25
兵庫	5,586,182	5,586,254	△ 72	△ 0.00	0.07	2,345,254	2.38	2.41
奈良	1,411,715	1,414,970	△ 3,255	△ 0.23	△ 0.33	555,909	2.54	2.57
和歌山	1,032,779	1,038,729	△ 5,950	△ 0.57	△ 0.69	428,389	2.41	2.44
鳥取	595,331	598,485	△ 3,154	△ 0.53	△ 0.65	226,434	2.63	2.66
島根	723,182	727,793	△ 4,611	△ 0.63	△ 0.73	276,298	2.62	2.65
岡山	1,939,449	1,943,864	△ 4,415	△ 0.23	△ 0.23	780,663	2.48	2.51
広島	2,856,308	2,859,300	△ 2,992	△ 0.10	△ 0.17	1,226,633	2.33	2.35
山口	1,464,275	1,471,715	△ 7,440	△ 0.51	△ 0.55	643,004	2.28	2.30
徳島	796,897	800,825	△ 3,928	△ 0.49	△ 0.64	320,344	2.49	2.52
香川	1,012,755	1,016,540	△ 3,785	△ 0.37	△ 0.27	410,801	2.47	2.49
愛媛	1,457,950	1,464,307	△ 6,357	△ 0.43	△ 0.49	630,260	2.31	2.34
高知	772,401	777,080	△ 4,679	△ 0.60	△ 0.89	349,612	2.21	2.24
福岡	5,038,574	5,031,870	6,704	0.13	0.02	2,175,227	2.32	2.34
佐賀	859,400	862,156	△ 2,756	△ 0.32	△ 0.30	309,659	2.78	2.80
長崎	1,450,027	1,458,404	△ 8,377	△ 0.57	△ 0.73	611,343	2.37	2.40
熊本	1,833,757	1,839,309	△ 5,552	△ 0.30	△ 0.29	729,603	2.51	2.54
大分	1,206,976	1,211,042	△ 4,066	△ 0.34	△ 0.36	508,207	2.37	2.40
宮崎	1,152,514	1,155,844	△ 3,330	△ 0.29	△ 0.45	500,694	2.30	2.33
鹿児島	1,722,405	1,728,554	△ 6,149	△ 0.36	△ 0.60	786,259	2.19	2.21
沖縄	1,406,176	1,397,812	8,364	0.60	0.47	559,851	2.51	2.54
合計	127,057,860	127,076,183	△ 18,323	△ 0.01	0.01	53,362,801	2.38	2.40

情　報

里山からの便り②

地域の底力を引き出すIターン

NPO法人 INE（いーね！）OASA（おおあさ）
有限会社 大朝交通
皆田 潔

お年寄りの知恵と技

全国同様、例年より暑い夏が弥栄にも訪れています。それでも都会に比べると源流の清らかなせせらぎと水田に蓄えられたその水のお陰で日中でもさわやかな風が吹いています。弥栄では珍しく32度を超えた日、働き者のオイチおばあちゃんの畑を訪れると「か弱い私には夏はやれんよぉ…アハハ言っちゃった」とおどけながら夏野菜の収穫に精を出しておられました。

私が弥栄のおじいちゃん、おばあちゃんの家を訪問すると、納屋から様々な道具が出てきます。長さ1メートルもある大きなのこぎりや、牛の背に荷物を載せるための道具、わらを編んで縄にする機械・・・弥栄のお年寄りが暮らす家庭には必ずと言っていいほど歴史民俗資料館で目にする道具が眠っています。農山村に暮らすお年寄りは昭和初期のモノが不足した時代に身の回りの自然資源を採取し、自らの手で加工し、使いながら使い勝手が良いように改良し、壊れたら修理して、長く大切に使ってきました。ところが高度経済成長期を境に暮らしが豊かになり、大量消費社会を迎え、身の回りの環境に合わせて加工し作る「技」はやがて薄れ、こうした道具は使われることなく眠っています。それでもこれらの道具が大切に保管されているのは、「モノがない時代」を生き抜いてきた人々が持つ「もったいない」という気持ちの現れなのだと感じます。「作る技」が消えると当然「修理する技」も消えていきます。暮らしも職も身の回りの自然を活用する自給的な生活を送り、さらには次世代のことを考え、その資源が絶えることのないよう世代を跨いだ長期的な計画に基づいた管理がなされてきたからこそ今日の里山が維持されているといえます。それが周知のように高齢化後継者不足により、身の回りの自然に手入れが行き届かなくなり結果として里山は荒れていく負の循環に陥っています。

弥栄の高齢者との会話で、現代では使われることのなくなった道具について盛り上がります。「何に使うんですか？」と聞くと、「昔なぁ…」と始まり、時には数時間にわたって、若いころ山や農地で活躍されていた頃の話しを懐かしそうに話されます。こういう話題は自分の子どもや孫にもあまりされない―私も親から昔の話を聞いた記憶はなく、聞こうとしたこともないことに気がつきました―ようで、弥栄生まれ弥栄育ちではない私にたくさん話しをしてくれます。その目は輝き、往年の職人魂が蘇ったかのようにいきいきとされます。こうしてみると、お年寄りの皆さんはいまこの時代に「自分ができること」を探しているかのように感じます。

私たちのように外部の地域から農村に居を移したIターン者はそうした人々の底力を引き出すのに最適であると考えます。

10年前弥栄にIターンしてきた、藤井礼子さん（40歳）はお年寄りの知恵や技を引き出す達人。藤井さんは埼玉、東京で生まれ育ち、三味線などの和楽器の製造販売の仕事をされていましたが、里山で暮らしたいと家族4人で弥栄にきた一人です。公民館の嘱託職員を経て現在は安城公民館主事を務めています。

ここで藤井さんがつくったことはまず、高齢者が集まる場としての公民館を築き、交流を深めました。そして、話せば話すほど出てくる農山村に生きる知恵と技に惹かれていったのです。地域のおじいちゃんと蔵に入り、煤竹（すすだけ…いろりの煙に慰撫された独特な艶をもつ竹）をもらってきたり、じんばり（柿渋を塗った敷物）を借りて公民館に飾ったり。そういう懐かしいものを人目に触れる場に出すと、おじいちゃん、おばあちゃんの話題は尽きることはありません。藤井さんが公民館主事になってから生まれた事業は高齢者の知恵や技を活かす取り組みばかりとなりました。館長の小谷悟さんは弥栄生まれの弥栄育ち、当時農協職員として弥栄の農業を支え、その後、村議会議員となり、非常に地域に精通し猪突猛進の藤井さんをそっと支え、その絶妙なコンビに公民館には人々が集まり、地域課題を語り合い、解決に向けた行動を高齢者が一丸となって取り組んでいます。都会に生まれ都会で育った藤井さんは、「知らないことばかりで私には何も出来ないけど、おじいちゃん、おばあちゃんが楽しみを作れたら」と控えめな言葉をつぶやきますが、高齢者の技と知恵の奥深さとその重要性を理解しているからこそ、熱

△「しんばり」を地元小学生に紹介し、高齢者と子どもが接する機会をつくりました。

意のある行動ができるのでしょう。

▼ーターン者の役割

平成19年夏、島根県中山間地域研究センターが主体となって弥栄などをフィールドに実施した「国土施策創発調査事業～維持・存続が危ぶまれる集落の新たな地域運営と資源活用に関する方策検討調査～」において、弥栄と縁もゆかりもない私が、不足する地域運営の担い手を支援し、途切れた関係を束ね、地域活動を維持するという仮説に基づき、小規模高齢化集落において「（集落の）見つめ役」、「（資源の）見つけ役」、「（人材の）支え役」として「里山プランナー」という役割を担う社会実験に参画した訳ですが、藤井さんはそれ以前からその役割を既に果たしていました。弥栄に住むようになって間もなく彼女に出会い、弥栄の様々なことを教えてもらいました。そして、この事業で作ろうとしていた「人材データベース」を既に作られていたことを知りました。地域外から訪れた人材はこうした人々を繋ぎ、束ねることに適した役割であることを、その役を担うのが目的で配置された自らが実感した反面、藤井さんとの会話のなかで、外部人材は孤軍奮闘しがちで、地域をまとめていく上で相談する人が著しく乏しいこともわかりました。私は島根県立大学のサークル「里山レンジャーズ」の力を借りて、労働力が不足する場面で学生が一緒に活動する仕組みを作り、高齢者は若者との交流ができることを大変喜んでもらえるようになりました。

藤井さんが地域の人材や資源を活かす役割、私たちは労働力を補完する役割、それぞれが得意とする分野を分担して進めることが、地域を束ねていく上で非常に重要であると思いました。現在、地域おこし協力隊など都市の若者が農村に住み、地域活動を支援する制度がありますが、視察や話題提供の場などでは必ず二人以上で地域に参画することが望ましいと伝えているのですが、こうした経験からお話しさせてもらっているのです。

▼ものづくりへの取り組み

さて、藤井さんの試みで特筆しなければならないことがあります。それは「ものづくり」です。弥栄は平成17年に中国地方初のどぶろく特区に認定され注目を集め、現在でも多くの観光客がどぶろくをおみやげに購入しています。しかし子どもが口に出来る産品がなかったため、彼女は弥栄産原料にこだわり、米粉と有精卵を使ったシフォンケーキやプリンなどのスィーツを作る事業を平成18年に興しました。それまでに3年の時間をかけ、後継者不足、米価の低迷に将来への危機感を強く抱いている地元の小坂農業生産組合と二人三脚で弥栄産米粉を使ったシフォンケーキを世に出しました。

今となっては米粉を使用したケーキは全国各地で作られていますが、当時、まだ米粉の知名度は低く、その質も十分ではありませんでしたが、試行錯誤の末、グルテンを使用しなくても膨らむ米粉100％のシフォンケーキを完成させ、新聞等に取り上げられるほど注目を浴びるようになり、現在は公民館主事とパティシエの、弥栄をこよなく愛す弥栄の住民に知らない人はいないほどの人材になっています。

昨年からは20ａの耕作放棄地を借り、農業未経験であるにも関わらず、コメ作りに挑戦されています。近所の農家も請け負うことすら出来なかったその農地も、藤井さんが取り組むとなれば「話しは違う」といった感じで、多くの住民が自らの農作業の合間を縫って藤井さんが借りた水田に集まります。そして機械を提供し、手伝いを買って出て集落のみんなで栽培するコメ作りが行われるようになりました。

農業機械がない時代、各々の水田を地域住民が協力しあって栽培していた時代の話しを思い出し、現代の「結い」の姿をここに見た気がしました。この水田の近隣に住む住民は、藤井さんが仕事で忙しくて管理ができない期間、何も言わず、水田に入り手で雑草をとり、病気が付かないか、いつも様子をみてくれていました。「来年も草とりしてあげるから、ずっとここでつくってね」と、草刈り、草取りはどの作業よりも重労働であるにも関わらず、笑顔で話されていました。人々の交流が固定化した集落に外部から人々が寄り集まる事によって、楽しみや生き甲斐

情　報

が生まれ、新たな活動が芽生えたのです。

▼後継者育成という課題

一方で、先述の弥栄産にこだわったスィーツがいま危機を迎えています。有精卵を供給する採卵鶏農家を営むーターンの若者が体調を崩し、最盛期並の生産が困難になりつつあります。この若者も強いこだわりを持ち、質の高い有精卵を産ませる技術を持っていました。ここにもーターン者が孤立しがちな特徴が現れています。養鶏業を始めてからまだ日が浅く、いくら良質な商品があっても、それを持続的な事業にするための後継者育成が間に合わないという背景が浮き彫りになりました。現在は元々従業員であった後任の方が、研究を重ね以前と同等の生産量に戻す努力を日々重ねられています。

ここで述べたのは一例に過ぎないものの、一人のーターン者が住民を繋ぎ、協働で取り組み、一つの産品を作り出し、収穫の喜びを共有する場面に立ち会い、地域外の人材が地域を盛り上げる重要な役割であることを認識しました。

そして藤井さんの水田に集まる集落の人々とその強い絆を見て、集落機能の限界化、危機化が取りざたされているものの、「まだまだ集落は元気なんだ」とその底力を実感し、様々な人々との交流を楽しみにされるようになった住民の変化が弥栄の魅力を引き上げるきっかけになると強く感じました。

一方で、有精卵の供給不足の事態からもわかるように、ーターン者が地域に根ざすようになるまでは長い時間が必要です。藤井さんは「ーターン者は浮き草みたいなもの、最初は花が咲くけど根がないから定着が難しい。浮いていられるのは10年」と話します。弥栄に来て10年～20年経つ多くのーターン者がこれからもしっかりと地域に根を張っていけるかが、課題と言えます。

▷農家の方に使い方を教わりはじめて肥料散布を行う藤井さん（左）

信州縦断　元気なふるさと収穫祭めぐり2010

7月から12月までの間、長野県町村会の主催による「信州縦断　元気なふるさと収穫祭めぐり2010」が実施されています。

今年で7年目を迎えるこのキャンペーンは、県内58町村が地域住民との協働で行う収穫祭、農業祭、物産展、産業祭等を県内外に情報発信することにより、多くの人々を信州に呼び、地元特産品、農林産物の紹介や販売、そして地元の人々との交流を通じて「ふるさと（町村）」の「元気」と「よさ」を広くアピールすることを目的としています。

長野県内では夏から秋にかけて新鮮な農産物や特色ある産品に出会えたり、大自然との触れあいが楽しめるイベントが目白押しです。

ぜひ美味しいもの、そして「町村の元気」を探しにふるさと信州にお越しください。

なお、詳細については町村会のホームページをご覧ください。

◎長野県町村会
電話026－234－3530

ホームページ
http://machimura-nagano.jp/furusato2010/

随　想

「日本一のまちづくり」挑戦から実現へ！

山形県庄内町長　原田　眞樹

本町庄内町は、山形県の北西部、米国アカデミー賞受賞映画「おくりびと」のロケ地酒田市と、時代劇で有名な小説家「藤沢周平」の生誕地鶴岡市、この両市の中央部に位置しています。

平成17年に、旧立川町、旧余目町の2町による平成の大合併で誕生したコメづくりを中心とした人口2万3千人余の農業の町です。

また、松尾芭蕉の「奥の細道」でも名高い、山岳信仰の山「月山」、その山頂を有し、全国のおいしいコメ、コシヒカリやササニシキのルーツである品種「亀の尾」の発祥の地でもあります。他にも「ストック」や「トルコギキョウ」など、全国の花き市場で評判の日本一品質の高い花づくりなどが特徴です。

さらに、近年、「月山」山頂から注ぐ「立谷沢川」の水が、環境省の「平成の名水100選」に、経済産業省の「新エネ100選」にも、行政としては日本で初の風力発電などへの取り組みで選定されました。

このダブル受賞は、東北・北海道地区では庄内町だけであり、今後は、さらに、環境にやさしい町として、グリーンツーリズムなど観光にも活用していくつもりです。

現在、厳しい経済環境の中、「産業振興なくして町の発展はなし」との考えを中心に、雇用の確保や景気対策を行っています。建築を中心に、若者などの定住化も図れる仕組みとして、地元の業者に仕事を発注すると祝金がもらえる「持家住宅建設祝金制度」を創設しましたが、2年間で13億円余の地元の仕事を掘り起こしています。この制度は、新聞でも紹介され、第2の公共事業として県内や全国に広がっています。

少子化対策では、昨年「子育て応援日本一のまち宣言」を行い、現在日本一と自負しておりますが、さらに住民あげて子育てを応援する機運を高め、保護者の負担軽減を積極的に図ってまいります。近年は近隣市町村からも、本町に住んで子育てをしたい、といった声が聞こえるようになりました。

高齢者には、「元気でご長寿日本一のまちづくり」を目指し、徹底した健康意識の啓蒙を図ってまいりました。その結果、近年、県内市町村の中で、国保会計の一人当たりの医療費が低位に位置しています。

疾病別でみると合併前から合併後の平成17年と21年での比較では、糖尿病、心疾患、脳疾患はほぼ半減しています。ただ、悪性新生物(がん)ではほとんど変化がないという結果もあり、今年から早期発見・早期治療の徹底を図り、がん検診の無料化をスタートさせました。

また、肺炎が原因で亡くなる率も高いことから、予防としての肺炎球菌ワクチン助成なども行っています。

さて、現在、世界中が環境問題や経済問題などで、大変革の様相を呈し、一町村においても世界の動向を注視し、対応しなければならない難しい時代になりました。また、国内の政治経済の混乱も当分収まりそうにありません。しかし、少子高齢社会、人口減少、都市と地方の格差など、これらは国と地方に共通の課題であり、このようなカオス（混沌）の時代だからこそ、地方からの発想や提案が実現出来る事も多いと考えています。

地方分権一括法が2000年4月に施行されてから早くも10年になります。

国と地方が対等の立場となり、その地方の特色を生かして等しく生き残れることが真の地方分権だと考えています。その実現のためには地方が求める権限の移譲とともに財源の確保が不可欠であり、今後の真の地方主権の進展を強く望んでいます。

また、我々地方も、国に求めるだけでなく自らも変わる必要があります。現在の行政の仕組みや仕事を根本から見直し、公開度を高め、住民、議会、行政が、より一体化し、地方が必要とする「新しい公共」を創り上げなければなりません。

本町の目指す将来像は、「自然はみんなのエネルギー、生き生き元気な田園タウン」、「日本一住みやすく、住みつづけたいまち」です。

その挑戦から実現に向けては、既成の概念にとらわれず、発想を転換し、住民との真の「協働と参画」を深め、共に輝ける町を目指してまいります。